近代の文学 4

森田草平の文学

根岸正

根岸正純（ねぎしまさずみ）

大正9年東京に生まれる
東京大学文学部国文学科卒業
現職—岐阜大学教授
住所—岐阜市鷺山緑ケ丘112

検印省略

森田草平の文学　　近代の文学4

昭和五十一年九月十日　初版印刷
昭和五十一年九月十五日　初版発行

著者　根岸正純
発行者　及川篤二
印刷所　都印刷
製版所　国際文化交易

101　東京都千代田区猿楽町二—八—一三
㈱桜楓社
電話(〇三)二九一—五六六一
振替　東京　六—一八〇二〇

1976 M. N. ©　Printed in Japan　3093—760975—0723

根岸正純著

森田草平の文学

桜楓社

目次

第一章　初期の草平
一　少年時代……九
二　『草雲雀』および漱石師事……一五
第二章　『煤煙』と煤煙以後
一　煤煙事件と『煤煙』……三五
二　煤煙以後と『自叙伝』……六五
——短篇時代の出発——
三　『十字街』とその前後……八六
——「四つ辻」の思想——
第三章　大正前期の草平
一　『初恋』の女との再会……一〇五
二　女弟子たちの入門……一二六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

三　『反響』の発刊……一三四
四　西洋文学への傾倒と翻訳……一四六
——短篇時代の終結——
五　大衆小説と評論活動……一五八
六　夏目漱石の死と漱石全集の校正……一八六
第四章　『輪廻』とその周辺
——大正後期——
一　『輪廻』への道……一九九
二　『輪廻』とその成立以後……二〇八
第五章　昭和期の草平
——戦中まで——
一　歴史小説への出発……二二一
二　「シチュエーション」の説……二三六
三　法政騒動……二五一
四　歴史小説・その後……二六一
五　二つの随筆集……二七一

六　秀吉研究と『豊臣秀吉』……二八〇
第六章　晩年の草平
一　共産党入党……二九九
二　『細川ガラシャ夫人』及び終焉……三一八
むすび……三三〇
森田草平著作目録……三三六
参考文献……三六〇
あとがき……三六七
人名索引……三七二
目次細目……三七七

森田草平の文学

第一章　初期の草平

一　少年時代

森田草平は明治十四年三月、岐阜県稲葉郡鷺山村（現在、岐阜市鷺山）に生まれた。誕生の日は「自筆年譜」[1]では十九日としているが、戸籍上は二十一日である。生家は「草分名主と云われるような大庄屋でなかったばかりでなく、世襲でもなかった」が、「村の庄屋」であり、父亀松は菩提寺の門を寄進する程の名望家であった（『漱石先生と私』[2]）。しかし明治二十四年に死去したその父の死因が悪質の病気である疑いと遺伝のおそれ[3]、逆に父の実子ではないという疑惑もあり、そうとすれば遺伝の恐れから免れる代りに母とくの不義の子になるという宿命、それらに連なる暗い家系意識が、彼の文学を直接間接に制約していた。彼の出生をめぐる事情を正確に把握することは困難であるが、小説『輪廻』のストーリーが、父（亀松）の実子ではないという彼の確信の表明の様に思われてならない。だが若しそうだとして、『輪廻』以前の何時頃その確信を持つに到ったかは別問題である。

父の死去（五月）の年十月には濃尾大震災があり「初めて浮世の有為転変を悟った」（前出自筆年譜）。また小説「地震」や「大地震の日まで」の背景にもなっている。この年三月、岐阜市高等小学校（現在の金華小学校）に入学したが、二・三年生の頃には「他の子供と違って朝夕机に凭れて」活版本の岩見武勇伝・自雷也物語や頼豪阿闍梨怪鼠伝に読みふけって「母親から変人だと思はれて居た」（「初恋」）。その後も講談物や小説好きの少年だったこと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

に変りなく、また「初恋」に登場する遊女へ思慕をいだき始めたのは二年生十三才の時と推定され、村の番太郎の娘で女郎上りのお重（後年まで度々彼の作中に登場する重要な人物である）に魅惑を感じはじめたのもこの頃からであろう。こうして少年時に早くも恋の冒険者の面影が発見できるが、そうした情感と行動とを可能にした特殊な家庭環境も想像される。父は既に亡く、母は、数々の作品にも窺われるように、始終おどおどしていてこの多感の少年に訓戒や懲罰を与える様な素振りは微塵もなかった。草平を見るにつけ、過去の不倫への悔恨にさいなまれた。

明治二十八年、高等小学校を卒業すると、軍人を志望して単身上京し、当時海軍予備学校であった攻玉社に入学した。「日清戦争戦勝の興奮が岐阜の寒村にも流れて草平を軍人志望に向わせた」[4]のであるが、一つには「費用少なくて仕官の途を求めむがため」（同上年譜）でもあった。最初の下宿先は同じ鷺山村出身の金物商平野英助の家であった。草平はこの英助の子が当時の異色ある女形・四代目沢村源之助と思い込み、感慨に耽ったが、事実は英助の父と源之助とが従弟の関係であるという。[5]軍人志望については、「第一余り金もないし、（中略）非常なロマンチックな考え方から水雷にでもあって、ぶかぶか死んでしまうのが一番いいという気持」[6]だったともいい、「忠君愛国の思想に燃えたと云ふのではなくて、むしろ、軍人の華々しい死方に憧れたものらしかつた」[7]とも回想している。しかし志した学校とはじめて見る東京は期待はずれであったらしい。「初恋」には、

上京して、初めて志した学校へ行つて見た時、私はその狭いと汚いとに惘れた。芝口に宿を取つたまゝ、一週間許り通つて見たが、先生も教へることも詰らない。全体東京の街からして思つた程に美しくもなければ、立派でもない。これぢや如何しても長く居つく気がしない。

とある。のみならず「荒々しい校風と合致せず一人小説に読み耽るようにな」り、「主として『文芸倶楽部』（明二八・一創刊）を愛読し、広津柳浪の「黒蜥蜴」「今戸心中」「河内屋」泉鏡花の「夜行巡査」「外科室」川上眉山の「う

らおもて」樋口一葉の「にごりえ」「十三夜」等の小説に接したのも此頃であっ」て、「これら明治二十年代の所謂観念小説、悲惨小説が若い感じ易い心に如何に響いたか、デカダン的作風と、彼の性格と時と所（俳優源之助の生家——*彼の思いちがいだったことは前述）の相関性に興味深いものがある」と、伊藤孝子氏は指摘している。[8]

彼を軍人志望へと導いた上記のロマンチックな考え方と、発刊当初の『文芸倶楽部』に掲載の諸作品への傾倒とは、いずれも草平の資質につながっている。『文芸倶楽部』は以後次第に通俗化してしまったが、その「功績は、なんといってもその初期において」上掲のような「新進小説家の傑作が掲載されたことにあ」った。[9] 草平の愛読は丁度その時期に当り、新刊の雑誌であることや新進作家への好奇心が一層彼を刺戟した。そして後年にいたるまでしばしば棟割長屋などの場面を小説中に描き、下層民を登場させていることと照応している。例えば、「仮寝姿」（明三六）「四月尽」（明四三）「博徒の群」（明四五）「小狗」（大正元）などがそれであり、『虚栄の女』（大五）の主要人物も下層の生活者であった。こうした生涯を貫く嗜好の一面と出生にまつわる暗い意識が他者に対しても落魄の境遇へ彼の心を引きよせ、年少の頃の読書選択にも波及したといえるであろう。

そして休暇に帰省すると、村の作男の小伴をそそのかして長良川を小舟で下り、岐阜・金津遊廓の遊女に会いにいったりした（「初恋」）。

このような少年草平が軍人志望を貫けるはずがない。たまたま近視眼にかかって「軍人にならうとの志望も、自然に廃棄せねばならぬやうになつてしまつた」が、「しかし、同じ学校の海軍志望者達を見て、大分幻滅を感じると共に、少年時代から好きな文学の方へ向はうとする慾望が強くなつて居た際とて、近視眼にかかつたことも、別段残念には思はなかつた」[10]のである。こうして三十一年攻玉社を退学した。

「往時茫々」によると、その後神田の国民英語会（磯部弥一郎）に通ったが、中学卒業の資格を得る為に杉浦重剛

の日本中学校五年級に編入（日本中学には、小村寿太郎の息小村欣一、桂太郎の息桂与一等がいた）、保証人は朝日新聞記者加藤民柳で、民柳を通して「万朝報」の堺枯川に紹介され、民柳が函館日々新聞へ移ってからは枯川が彼の保証人になった。しかし「学校を転々とした上に容易に人と融合出来ず孤独な生活を送った」という。[11] その頃註釈本で「エノック・アーデン」をはじめ、「テニソンとかスコットとか」を「滅茶苦茶によんだ。」そのシリーズものは三十冊位もあったとは草平自身の回想である。[12]

三十二年三月中学卒業、帰郷したが、その後七月に四高に入学するまでの間に、同年の従妹森田つね（『煤煙』の隅江、『輪廻』の小夜子）を知り、その恋は急速に進んだ。従妹をはじめて知るという言い方は奇妙だが、父の病気のために親類縁者とは絶縁状態にあったであろうし、草平は長く東京に遊学していた。『輪廻』（大一二）の主人公・廸也に託された当時の彼は孤独と寂寥にさいなまれ、「暗い秘密を守る苦しさに堪へないで、知らず識らずの間に平生からそれを打明ける相手を求めてゐた。」そして、女との出会いは、

彼は一目見て女の顔に打たれた、又その声の色にもだんだん心を惹かれて行つた。が、その下から「これも俺にとつては他人だ、縁もゆかりもない女だ！」と云ふやうな心持ちが、むくむくと頭を持ち上げて云々

と描かれている。一体つねとの恋には、のちに『輪廻』で描出したように悪魔的な欲動が底流していたのだが、初期の作品では、情緒的な側面に片よせてとらえた傾向がある。例えば「棄てられたる女」（明三八）で、後述の岩田さくをモデルとするお種に対して、「『棄てられたる女』といふ、只それだけのことで自分はお種を恋ふるに至った」とのべるのとならんで、お辻（つねがモデル）については、

自分は嘗て田舎の少女に初恋をした。いふまでもなく、この時も只それが「田舎の少女」であるが故に恋をしたのだ。（中略）そして自分も矢張詩を作るやうな心持で恋をして居たのだ。

と書いている。ここには、孤独の慰藉を求める心とないまぜになった草平特有の女性思慕の原型が示されている。つまり「棄てられたる女」「田舎の少女」といった観念から自己暗示をうけて、現実の女性の上に悲境に泣きあるいは純情一途の幻像をかける傾向が見られる。従って一面では、献身や犠牲の姿勢を異性に求めることにもなる。「女」（初出未詳。『車の音』大三・五所収）という小文に、「罪と罰」のソニヤにふれて、

ソニヤに著しいのは、其の男に対する無限のデボーションで有る。他にも親や同胞に対する情愛の深いこと、人の善い所ばかり見て悪い所を見ないこと、丸で自信と云ふものがない様に、始終おどおどして生きながら、いざと云ふ場合に非常に決断力と勇気とを示す、一言にして云へば、自分の偉大な性質を知らずに居ることなど、いろいろ好ましい点は有るが、別けても好ましいのは、此世の男に対する敬虔なデボーションで有る。

とのべ、また同じ文章に、

女の教育有りや無しやは、別段エッセンシャルな問題には成らない。併し聡明な女では有つて貰ひたいと思ふ。飽迄聡明な女で自分に対してだけは痴愚に成つて貰ひたいと思ふ。

ともいっている。森田つねはまさしくこのような彼の要求と空想に合致した少女でもあったらしい。そして草平は十九才にして「人生の甘さ」（年譜）を知るにいたった。

七月には金沢の第四高等学校に入学したが、つねがその後を追って同棲したことが発覚して、十一月二日担任教授藤井乙男氏から諭旨退学を命じられた。年譜には「これより翌年の春まで名古屋市に放浪す」とあるが、その間の事情は小説「起請文」（大二）によってわずかに窺い知ることができる。同作の冒頭には、

私は女のために北国のさる高等学校を追はれて、故郷に居るのも面伏せなので、暫らく名古屋の従兄の家に逗留して居たことがあつた。

とある。そして小説中では、つねをモデルとするお巻が家出して訪ね来り、愛を誓うために起請文をとりかわして血判を押す場面が出てくるが、事実かどうかは審かではない。結びに近い箇所には、

其間、秋が暮れて冬が来た。又春が来た。私はかうして一年の間、何一つ摑んだ所もなく、ぽかんとして過して仕舞つた。

とあるが、「一年」は実際の期間の倍である。また、年譜では一高入学以後のこととして記している南阿戦争従軍の望みを、名古屋滞在中にもっていたように書いている。即ち上の文につづけて、

自宅では、最一度高等学校へ這入る様に皆衆してすゝめた。が、私は如何しても二たび面倒臭い入学試験など受ける気はない。それよりは、其頃開戦して居た南亜非利加へでも行つて、ボア人の独立軍へでも加はりたいやうな下心が有つた。

とあるが、もしそうならば、名古屋時代にいだいた従軍の志を一高入学後まで数ヶ月にわたって持ち続けたことになり、極めて鞏固だったことを裏書きする。

また、この間、森鷗外の『水沫集』を耽読した。年譜には「森鷗外先生の『水沫集』を手にして耽読措かず。純正文学に興味を有つに到りたるそもそもなり」と記し、「毎日森鷗外先生の『水沫集』ばかり読」み「「うたかたの記」や「舞姫」や「埋木」中の文句を殆ど諳誦するばかりになった」と回想している。[13] これは一高時代まで続いたようであるがそれはともかく、当年のロマンティックな志向が現実の自己にない典雅華麗な世界への渇仰に向けられていることを推定させる。それというのも、少年期という年令的制約があるにせよ、上述した創刊時の『文芸倶楽部』誌上の諸作品やテニソン・スコットをも含めて、この『水沫集』までは、耽読の対象も態度も、自己や現実をこえた世界への関心と憧憬につながっていた。私の知る限りでは、草平が愛読した次の作品は、三年後の明治三

十五年におけるシェンキーヴイッチの「十字軍の騎士」[14]やドーデーの「サッフオ」であるが、特に後者からの感銘のうけ方は、甚だしく趣が異なってきて作中人物への独特な共感が現れてくる。これは創作上での、「遺骨」（明三八・一）と「捨てられたる女」（同・六）との間の断層と、ほゞ三年の時期を隔てて照応するのである。

草平は、三十三年五月「思ひ出したやうに」上京して東片町に下宿し、根津権現境内にある下宿で文庫派詩人河井酔茗を識った。そして「兎に角六月の入学試験だけ受けて見ることにした。如何云う間違ひやら、それが通過した」（「起請文」）。ところが前述の様に名古屋滞在の時から懐いていたかと思われる南阿戦争参加の志が未だ強く、入学を躊躇していたが、酔茗の諫止にあって結局入学の道を選んだのである。このことを年譜では、

七月中、第一高等学校の入学試験に合格したるも、当時、アフリカの南端に所謂南阿戦争の勃発せるあり、ボーア人に加担して大統領クリューゲルの下にその独立戦争に参加せむとの志熄まず、容易に入学の手続きを踏まざりしも、河井氏等の諫止に会ひ終に志を変じて、九月に入つて漸くその手続きを了す。

と記している。なお『のんびりした話』所収の「偶感二三」に今少し精しい回想がある。南阿戦争は典型的な帝国主義戦争であり、結局征服者英国の勝利に終ったものの、英国史の一大汚点として知られる事件である。従って義憤を覚えるのは当然のことながら、直ちに参戦を夢見た草平の、やや向う見ずな正義感を知ることができる。

二 『草雲雀』および漱石師事

一高入学の翌年（明三四）から同人回覧雑誌『夕づつ』をはじめ、草平の文学修業が本格的にはじまったと考えられるので、一高入学以後、初期短篇の制作、それを集めた『草雲雀』の出版にいたる間は、一面からいえば『草雲雀』時代ともいうことができる。だが同時にこの間に夏目漱石との出会いがあり、入門するにいたるのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com